公益の風 #32

東北公益文科大学　名誉教授
遠山茂樹

森の中世イングランドと植物

私は公益大の開学時から縁あって鶴岡市に住み、退職後の現在も学部と大学院、それに酒田看護専門学校で非常勤講師として教壇に立っている。専門はイギリス中世史で、連合王国イギリスの一角を構成するイングランドの中世史を「森」という視点から眺めてきた。森は食料や木材の重要な供給源であり、王にとっては鹿狩りという最大の娯楽の場でもあった。「大憲章」（マグナ・カルタ）で知られるジョン王も鹿狩りを好んだ。実はこの有名な歴史文書も森とおおいに関係している。「大憲章」は「小憲章」ともいえる森の文書あってこそのものなのである。

鹿狩りをするジョン王

こうしたことも含め、長年中世イングランドにおける森と人間とのかかわりについて調べてきたが、振り返ってみれば、深遠な研究の森に足を踏み入れる前に、入口のあたりでうろうろして終わってしまった感が強い。それでも、樺山紘一編「世界史の鏡」シリーズに小書を加えていただいたことは身に余る光栄であった。ちなみに、樺山紘一の恩師・堀米庸三は河北町谷地が生んだドイツ中世史の大家で、帝大時代、私の恩師・小室榮一の学友であった。

一昨年、ある事典の企画で中世ヨーロッパの「森」に関する項目執筆の依頼があった。その中に「炭焼き」についても入れてほしいという要望があったので、何冊かの文献にあたってみたが、そのうちの一冊がテオプラストスの『植物誌』であった。テオプラストスは哲学者アリストテレスの弟子で、「植物学の祖」と称される人物である。本書を読み返しながら、その博識ぶりにあらためて舌を巻いた。と同時に、祖父といっしょに山に入り、かたわらで炭焼を手伝った子供の頃の記憶がよみがえってきた。私の森への関心は、生まれ育った宮城県北東部の純農村地帯で育まれた。

テオプラストスは哲学者にして植物学者でもあったが、哲学と植物という一見無関係に思える両者も意外なところで結びついている。たとえば、イギリスの哲学者ジョン・ロックは、経験論を論じる際にパイナップルを引き合いに出している。よりによって、一体なぜパイナップルなのか。この疑問に答えるには、ロックの時代、熱帯産のパイナップルがきわめて希少で、イギリス国内では自家栽培がかなわなかったという事情を考慮する必要がある。

当然のことながら、そうしたパイナップルは垂涎の的で、どんなに言葉を尽くして説明されたところで、実際に食べてみなければその本当の味はわからないし、パイナップルの実体もつかめないとロックはいう。自説に説得力をもたせるためにパイナップルという希少で甘美な異国の植物をもってきているところがミソである。

異国の植物といえば、羽黒の松ケ岡開墾記念館を訪れ、前庭に咲くダリアに魅せられたのはいつのことだったろうか。ダリアの原産地はメキシコや中米で、スペインに持ち込まれ、そこからヨーロッパ各地に広まった。日本への渡来は江戸末期で、明治末期から大正時代にかけて普及し、大正初期にはダリア熱も高まった。黒田清輝の名品《ダリア》はそうした当時のダリア・ブームのなかで生まれた。

バラというと西洋の花のイメージがつきまとうが、実際には北半球の広い範囲に分布し、日本にも十指に余る野生バラが自生する。こうした日本のバラは、中国原産のバラとともにヨーロッパに渡り、モダンローズの誕生に大きく貢献したのである。歴史のなかの植物。私が関心をよせているもう一つのテーマである。

公益大鶴岡キャンパス 市民向け講座

なぜ薔薇は愛されるのか

～西洋のバラ・庄内のばら～

2024年
3月20日（水・祝）
午後1時30分～
午後3時45分

荘内日報社「敬天愛人」2024年3月号（Vol.180）掲載